

陸産貝類保全ワーキンググループの検討概要

1. 陸産貝類保全ワーキンググループ設置の経緯

平成20年度に設置された「プラナリア対策・陸産貝類保全検討会」（平成27年度に検討会名称を「陸産貝類保全・プラナリア対策検討会」に改称）は、主に父島におけるウズムシの拡散に対する脆弱な固有陸産貝類の保全方針及び保全技術の検討を行い、具体的な環境省の保全事業にフィードバックすることを目的としてきた。

その後、兄島におけるクマネズミによる陸産貝類の被害や、母島における貝食性プラナリア及びツヤオオズアリの侵入など、小笠原諸島全体の固有陸産貝類にとって危機的状況が生じていることを受け、平成28年3月に上記検討会を発展的に解消させ、科学委員会下部ワーキンググループとして「陸産貝類保全ワーキンググループ」を設置した。

2. ワーキンググループ（WG）の概要

（1）ワーキンググループの構成

名 称	小笠原諸島陸産貝類保全ワーキンググループ	
設置期間	<ul style="list-style-type: none"> ・平成28年3月～ ・平成28年度はこれまで2回開催（7月、12月） ・平成28年度中に第3回を開催予定（2月） 	
事務局	管理機関（環境省、林野庁、東京都、小笠原村）	
メンバー （敬称略） （○：座長）	大河内 勇 日本森林技術協会 業務執行理事 大林隆司 東京都農林総合研究センター生産環境科 研究員 加藤 英寿 首都大学東京大学院 助教 佐々木哲朗 小笠原自然文化研究所 副理事長 杉浦 真治 神戸大学大学院 准教授 ○千葉 聡 東北大学大学院 教授 和田慎一郎 森林総合研究所 特別研究員 亘 悠哉 森林総合研究所 主任研究員	（五十音順）

※H27年度まで科学委員会下部「新たな外来種の侵入・拡散防止に関するワーキンググループ」で扱ってきた、母島における外来プラナリア類の侵入の未然防止及び侵入時の対応や、苗の持ち込みに関する水際対策の話等も本WGで扱う。

(2) 平成 28 年度の本 WG における主な検討テーマ

- ・小笠原諸島における固有陸産貝類の保全方針の策定
- ・プラナリア対策
- ・固有陸産貝類の生息域外保全

時期	主な議題（案）
第 1 回 平成 28 年 7 月 27 日	1. 現況報告 (父島重要地域のプラナリア類及び固有陸産貝類の生息調査の結果報告、域外保全・屋外飼育施設等、兄島のネズミ対策の進捗、母島ツヤオオズアリ対策)
第 2 回 平成 28 年 12 月 1 日	1. 現況報告 (父島重要地域の陸産貝類の現状と対策、母島における陸産貝類の現状と対策、兄島における陸産貝類の現状と対策、媒島・聳島における陸産貝類の現状と対策、屋内飼育の状況・導入先の検討) 2. 小笠原諸島における陸産貝類保全方針について
科学委員会 平成 28 年 12 月	WG 検討成果の報告
第 3 回 平成 29 年 2 月	1. 小笠原諸島における陸産貝類保全方針について 2. 次年度の実施方針

3. 陸産貝類保全ワーキンググループにおける検討内容

平成 20 年度からの「プラナリア対策・陸産貝類保全検討会」の時代から、父島島内の固有陸産貝類の生息状況とウズムシの侵入状況を確認するためのモニタリング調査を実施しながら、プラナリア類の防除技術（殺虫・忌避・誘引）の開発を進めてきた。

電気、液剤、熱湯、冷凍、燻蒸等によるプラナリア類殺虫効果や、薬剤による忌避効果は確認され、通電ロープを使った侵入防止柵やセンサー板、薬液マットでの一定期間の忌避等は実用化されている。しかし、一旦侵入したプラナリア類を排除する有効な方法は未だ確立されておらず、平成 22 年度より保全の緊急性の高い種から域外保全に着手しているほか、引き続きプラナリア類の誘引実験を進めている。

域外保全のための技術開発については、室内飼育によるカタマイマイ属の保護・増殖技術は確立された一方、微小貝の保護・増殖技術は未確立である。また、より多くの個体をより自然な状態で保護・増殖する野外飼育技術に関しては、父島の集落地周辺の実験施設で検討を進めているが、累代飼育には至っておらず、環境条件と餌条件のどちらが要因か、検証を進める。さらに、ウズムシが未侵入の西島に飼育個体を導入（保全的導入（定着支援））する検討がなされているが、実際の西島への導入に当たっては、島民の合意形成が必要となる。

固有陸産貝類の保全状況が、これまでの主な検討対象範囲であった父島のみならず小笠原諸島全体において危機的になりつつあることから、当ワーキンググループでは、父島のみならず、小笠原諸島全体の陸産貝類の保全を対象としている。

母島では比較的多数の固有陸産貝類が生息しているが、固有ノミガイ類の減少に関与して

いとされるツヤオオズアリや、新たに確認された外来陸産貝類であるアジアベッコウマイの侵入が報告されており、その分布状況の把握や駆除の試行がなされている。新たな外来種の侵入を未然に防止する必要性が改めて確認され、手法の一つである外部からの土付苗の温浴について検証が進められている。

兄島では、陸産貝類を捕食するクマネズミの駆除のため、平成 28 年 8 月に殺鼠剤空中散布が行われたところであり、陸産貝類のモニタリングを今後も続けることによりその効果を検証するとともに、再度兄島でクマネズミが確認された際には、モニタリングを継続することで、様々な陸産貝類保全対策の選択肢を検討する。

聳島・媒島においては、陸産貝類の生息環境を劣化させる外来植物（ギンネム、タケ・ササ類）の駆除と在来植生の回復が必要であるとともに、媒島ではクマネズミ対策が必要とされている。

今後の中長期的な小笠原諸島全体の陸産貝類保全の方針を示す「小笠原諸島における固有陸産貝類の保全方針（案）」の検討を平成 26 年度より継続しており、平成 28 年度第 3 回 WG において取りまとめる予定である。

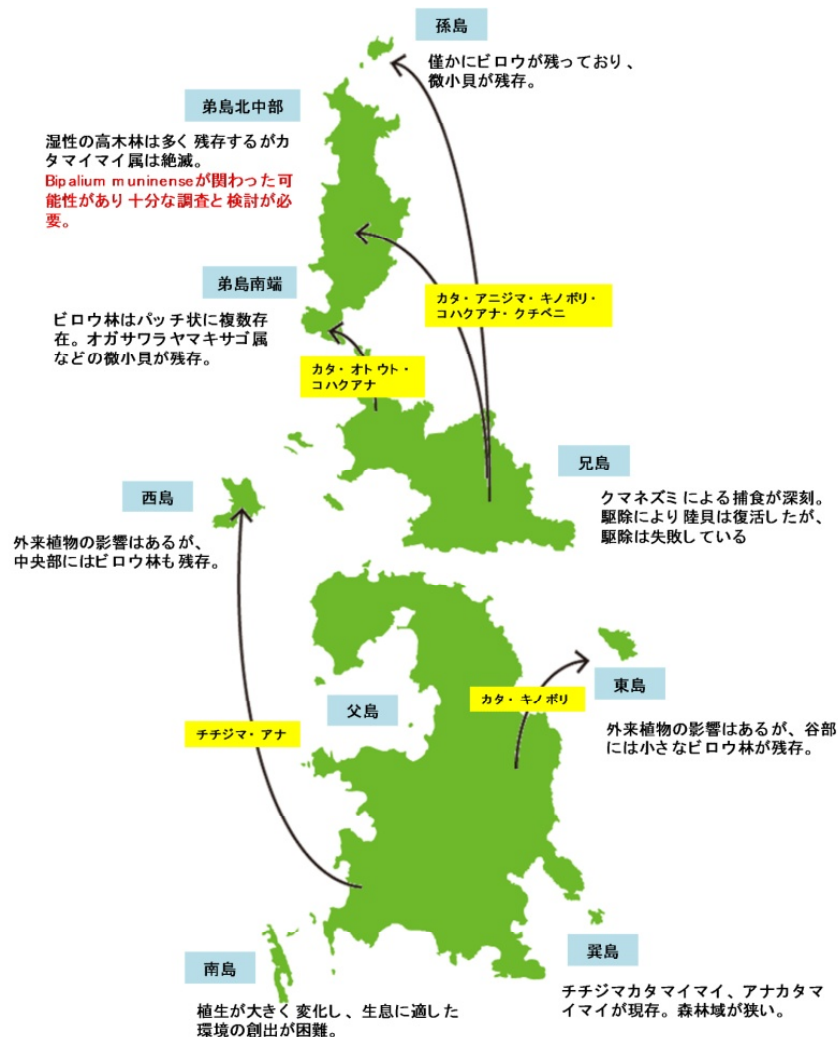


図 父島列島陸産貝類（とくにカタマイマイ属）の移送に関する地理的整理（平成 25 年度第二回プラナリア対策・陸産貝類検討会参考資料 3 より抜粋）

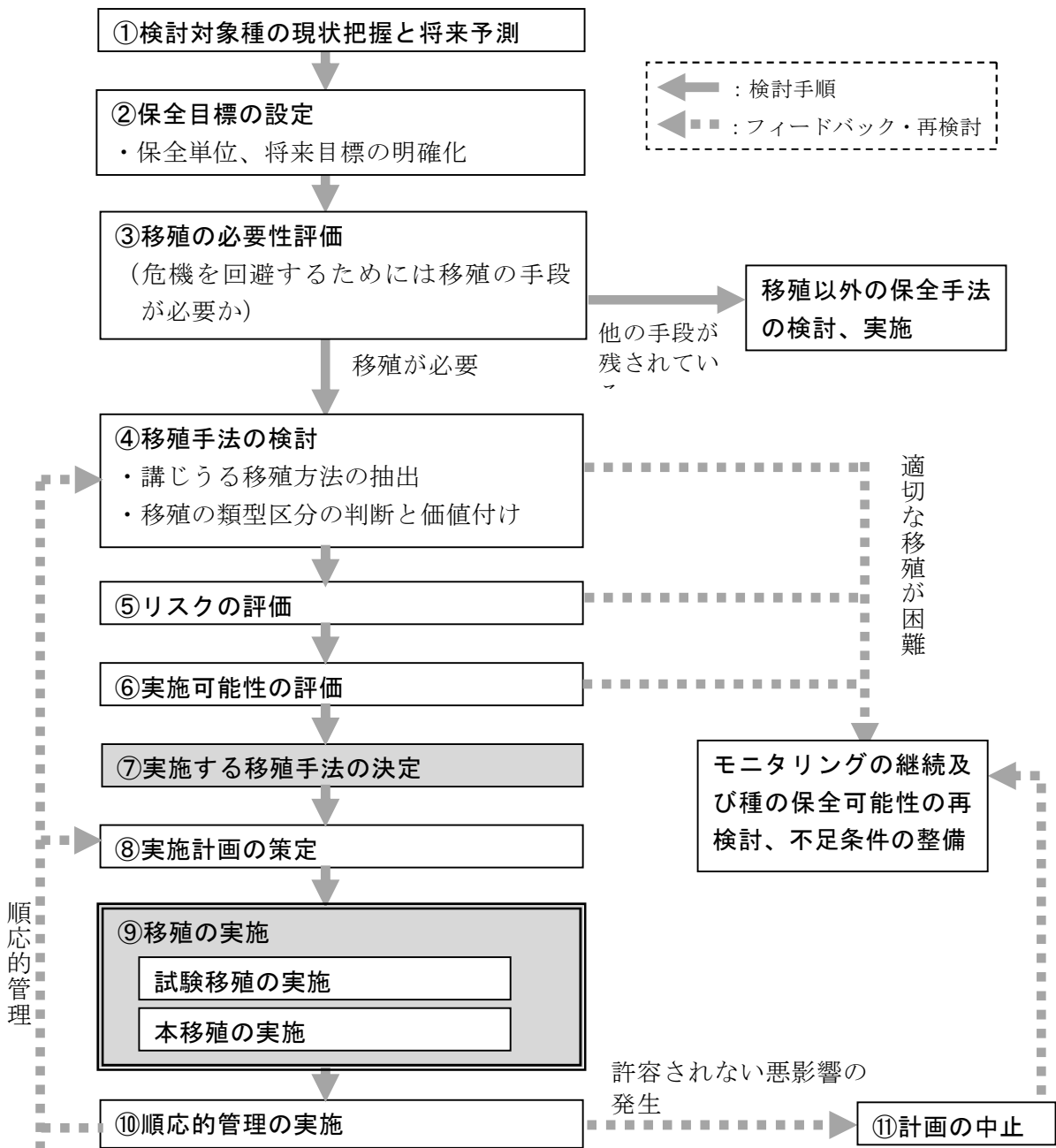


図 移殖計画の検討プロセス（「小笠原諸島における希少動物の保全目的の移殖を計画するにあたっての考え方」(平成 27 年 3 月、小笠原諸島世界自然遺産地域科学委員会事務局)より抜粋)